

学園だより

弘前大学

2016年 3月号

Vol.
186

特集

卒業・修了・退職にあたって
卒業生・修了生・教職員

Contents

- I 巻頭言
弘前大学長 佐藤 敬
- II **特集 卒業・修了・退職にあたって**
卒業生・修了生・教職員
- III 研究室紹介
- IV けいじばんコーナー
- V 編集後記

I 巻頭言



弘前大学長

佐藤 敬

文字通り“光陰矢のごとく”月日が過ぎ去る思いを強くしている今日この頃です。そして平成27年度も短く終わろうとしている中、今年もまた弘前大学を卒業、修了あるいは退職される皆さんにお礼とお祝いを申し上げる時が来ました。皆さんお一人おひとりが弘前大学に在籍した期間はさまざまですが、その期間の如何にかかわらず、本学の教育研究活動に大きな貢献をしてくださり、また、私自身も公私にわたってお世話いただいたことに心からお礼を申し上げます。このことは、卒業または修了される学生諸君にもあてはまることであり、学生の皆さんの存在は大学における教育研究活動の主役であったことに間違いありません。

いつの時代にも教育改革は終わることのない営みであり続けてきたことは真実であり、また、そうあるべきだとも思いますが、大学が改革の真ただ中に置かれなかったことはこれまで一度もなかったと思います。しかしながら、ここ数年間の全国の国立大学の動きと、なかでも、弘前大学における変革は歴史的にも大きなものと言えるのではないのでしょうか。そのような中、皆さんには、それぞれの立場で大学の運営や教育研究活動を力強く担っていただきました。これまでの皆さんの努力を大いに称えるとともに、心より感謝を申し上げるものです。大変ありがとうございました。

学部を卒業される皆さんと大学院を修了される皆さんにとっては、今後、進学・就職いずれの道を選ぶにせよ、これまでとは多少違った新たな生活が始まるものと推察します。なにより、皆さんの今後のキャリアが輝かしいものになることを願っていますが、これからの長い人生の間には、俗に言う山もあれば谷もあると思います。しかしながら、よく言われるように、困難に直面する時こそ飛躍するチャンスであることも事実であり、しかも若い皆さんには大なる可能性があります。例え時には失敗があったとしても、むしろそれを糧として、今後のキャリアを成功裡に歩んで行かれるよう祈念しています。その大なる可能性の故に、卒業あるいは修了される皆さんに心からお祝いを申し上げます。大変おめでとうございます。

本学を去られる事務職員の方々におかれては、勤務期間内を通して多様化する業務やまったく新しい業務へのチャレンジなどに努力して来られたことと推察します。そのような皆さんのお仕事があればこそ、今日の弘前大学があります。特に定年を迎えられる皆さんの中には、弘前大学が唯一の職場であった方々も少なからず居られると思います。長い経歴の間にはさまざまな出来事が

感謝を込めて

— 弘前大学を去られる皆さんへ —

あり、残念ながら、必ずしもその全てが良い思い出ばかりではなかったかもしれませんが、弘前大学の職員としてキャリアを終えられることを、現時点ではおしなべて幸いに思っただけだと願っています。また、他大学に異動される皆さんには、今後のお仕事の中で弘前大学における経験が少しでも役に立つことがあれば幸いに思います。また、特に他大学に異動される教員の方々には、弘前大学における成果をさらに発展させていただくことが本学の実績として評価されることでもあると思います。その意味でも、今後ますますのご発展をお祈りします。加えて、他の大学等から赴任して下さった方々には、他大学での経験を弘前大学にもたらしただけに感謝するものです。

今年度末をもって退職される教員の皆さん、あるいは他大学に異動される教員の皆さんには、本学の教育研究の推進に大きな役割を果たしていただき、その成果として、学外からは、弘前大学の卒業生の活躍振りを高く評価する関係者の声をしばしば聴いています。そのことは個々の学生の努力によるのはもちろんのこと、教職員の皆さんのご指導、ご支援の賜物でもであると信じています。しかしながら、これから等比級数的に進行すると考えられる少子化と人口減少、そして地方社会の規模の縮小（個人的には衰退という用語は避けたいと思っています）は、特に地方の国立大学にとって大きな課題であることに間違いありません。弘前大学はその入学者の多くを東北・北海道から迎えており、少子化の傾向が著しい地域に立脚していると言わざるを得ません。「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+）」をはじめとする卒業生の地元定着を促進する私たちの努力が実ることを願ってはいますが、この地域の将来的課題は本質的に私たちの努力のみで解決されるものでもないと思います。そのような現実を前提とした上で本学の教育研究の在り方を考えるのが私たちの使命であり、それを考える時忘れてならないことの一つは、皆さんを含めた弘前大学の全ての先輩学生・教職員が築き上げてきた本学の歴史であると思います。

弘前大学はその前身となった師範学校、旧制高等学校、医学専門学校などの時代から地域との密接な連携の下に教育研究活動を進めてきました。また、1949年に新制弘前大学として再出発を遂げた経緯においても、その後の活動においても、地域の大きなご支援をいただいて現在に至っています。特に最近では、青森県や弘前市からの

寄附講座の設置に加え、地（知）の拠点整備事業（COC）及びCOC+、革新的イノベーション創出プログラム（COI STREAM）、地域イノベーション戦略支援プログラムや学都ひろさき未来基金をはじめとして、地域からのご支援や地域との連携によって可能となっている教育研究の取組は数多くみられます。文部科学省による大学の機能強化に関わる支援の三つの枠組においても、弘前大学は地域の活性化に貢献する大学を目指すことを選択し、第三期中期目標期間の基本ビジョンにもそのことを明確にしたところです。このことは、特徴的な教育研究を進める大学、あるいは世界レベルの教育研究を進める大学という他の二つの枠組に属する大学に比べて低いレベルにとどまることを意味するものではありません。他の二つの枠組に属する大学では決して実現できない目標を追及し、その過程で世界的な教育研究成果を挙げていくことは極めて崇高な取組と言えます。皆さんがこれまで担ってこられた成果を私たちはこれからも大切に引き継ぎ、今後の大学の活性化につなげていく決意です。

また、毎年のように続いてきた国立大学運営費交付金の削減により、弘前大学においてもここ数年は“経営”が大きな課題としてクローズアップされてきました。皆さんの努力もあって、これまではなんとか健全な運営を維持してこられました。今後は今まで以上に自己財源の確保に努めるなど、さらなる努力が必要になるものと覚悟しなければなりません。上にも述べた地方創成への貢献や地域における高等教育の機会の確保はもちろんのこと、あらゆる価値観を超えて、弘前大学が今後も力強く教育研究活動を推進していくことが地域貢献の大前提であると信じています。皆さんには、今後も私たちの取組を暖かく見守っていただき、引き続き直接、間接のご支援を弘前大学に賜りますよう宜しくお願い申し上げます。

終わりに、今年度末をもって弘前大学を去られる学生・教職員すべての皆さんに改めて感謝を申し上げますとともに、弘前大学における皆さんの日々を懐かしく思い出していただければと願って止みません。特に弘前を去られる皆さんには、なんらかの機会に再び弘前の地と弘前大学を訪れていただければ幸いに思います。そしてなにより、今後の皆さんのご健勝とご活躍を心からお祈り申し上げます。最後に、今後も弘前大学にご声援とご支援を賜りますよう重ねて宜しくお願い申し上げます。皆さんをお送りする言葉に代えさせていただきます。大変ありがとうございました。

人文学部



大学生活を振り返って

人間文化課程 小林晃太郎

私の大学生活は、たくさんの人に恵まれ、大変充実した4年間でした。講義やゼミで勉強・研究に励み、お金欲しさにバイトもして、貯まったお金で友達と思いきり遊ぶ。思い返すときりがない程充実した毎日過ごすことができました。そんな大学生活の中で特に思い入れが強いものはゼミでの活動です。日本考古学ゼミに所属し、東北地方の縄文時代について学んできました。2年生の時に参加した発掘調査は人生で初めての経験であり、自分の手で遺物を取り上げた時の興奮や喜びは今でも鮮明に覚えています。発掘調査においても、その後の報告書作成においても、皆で協力し合って何か一つの事を成し遂げる事の素晴らしさや、小さな事でもコツコツ地道に積み上げていく大切さをゼミの活動を通して教わりました。そして何より、社会に出たら文化財に携わる仕事がしたい、という高校生の頃からの夢を本気で目指そうと思えたきっかけでもありました。このように大学生活を謳歌でき、4月からは地元で学芸員として働くことができるのも、ご指導して下さいました先生方や先輩方、どんな時も支えてくれた友人や家族の存在があってこそだと思います。周りの人々への感謝の気持ちを忘れずにこれからも頑張っていきたいと思っています。本当にありがとうございました。



学生生活での多様な学び

現代社会課程 福士 幸

自身の学生生活4年間を振り返ると、悲喜こもごもの濃密な時間だったと感じます。中でも、社会行動コースに所属し、座学以外の学びを実践できたことは最も良い経験でした。フィールドに飛び出し、社会で実際に何が起きているのかを自分の目と耳で考えることは、今後の人生における貴重な財産となりました。青森県三沢市根井地区では多くの行事に参加させていただき、その活動を通して地域住民の生の声を聞くことができました。お母さん方がふるまう料理を一緒に食べたり、子どもたちと遊んだりするうちに、人口減少が進む地域社会では、持続可能な範囲での発展が必要であると学びました。

これを踏まえたうえで、後輩たちには身の回りの環境に敏感になることの大切さを伝えたいです。自分の姿勢次第で、アルバイトやサークル活動などの日常的なものの中にも、学びの機会はたくさんあります。当たり前になっているものを疑い、深く考えることで、家族や友人への感謝や自身の責任などを実感することができると思います。この有意義な4年間は何ものにも代えがたい時間でしたが、それが終わる今、改めて周囲の人々に感謝の気持ちを伝えたいと思います。お世話になった方々、ありがとうございました。



大学生活を振り返って

経済経営課程 高橋 幸一

弘前大学での学生生活は、得難い経験をすることができた非常に充実したものであったとともに、周囲の人々に恵まれた4年間であったと感じています。サークル活動やアルバイト、学校生活を通して多くの人と関わり、かけがえのない友人を得ることができたのは非常に幸運なことだと思っています。楽しい体験を共有するだけでなく、苦しいときには互いに支えることができる友人に出会えたことは、大学生活の中で得た最も大きな財産です。彼らとの出会いのおかげで、過去の自分から成長し、今の自分が形成されていると実感しています。これから社会人となり、学生時代よりも多くの人々と出会い、関わっていくこととなりますが、新たな出会いを通じ、より大きく成長したいと考えるとともに、これまでに会った人々との縁を大切にしていきたいと考えています。

最後になりますが、私が大学生活をかけがえのない充実した時間だったと振り返ることができるのは、これまで私をご指導して下さった先生方や先輩方、支えて下さった友人や後輩のおかげです。これまで本当にありがとうございました。



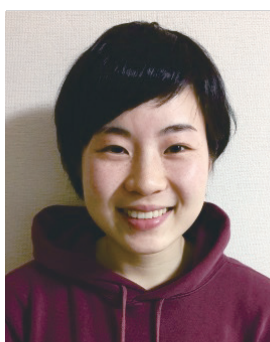
教育学部



弘前大学を卒業するにあたって

学校教育教員養成課程 田中 圭太

私が弘前大学に入学してから早4年、とうとうこの春卒業を迎えることとなりました。入学当初は全てが分からないことだらけの毎日でしたが、日が経つにつれて、色々な人に支えられながら大学生活に順応していくことができました。この4年間、弘前大学に在籍していたことは一生の思い出です。学科、サークル、バイト問わず、私の周りしてくれた優しい先輩方や気の置けない友人達、慕ってくれた後輩達には感謝してもきれません。本当にありがとうございました。そして、私はこの春から、かねてからの夢だった教員という職に就くこととなります。弘前大学教育学部で学んだことを活かしつつ、気持ちを新たに、社会人1年目としておおいに躍進できるように努力していこうと思います。私にとって弘前大学は、自分のやりたいことを見つけれれる素晴らしい環境でした。これを読んでくれた在校生は、どうかこのかけがえのない4年間を無駄にせず、夢に向かって、ひたむきに頑張ってみてください。努力は必ず報われる！！



大学生活4年を終えて

学校教育教員養成課程 本多 舞

地元を離れ、弘前に来てから4年の月日が経とうとしています。始めは知らない土地で慣れない思いを沢山しました。大学1年時に学校の敷地内で見慣れない鳥を見つけ、近くを通りがかった友人に、興奮気味に「変な鳥がいるよ!!」と伝えると、不思議そうに「キジでしょ?」と答えられ、強烈なカルチャーショックを受けたのを今でもよく覚えています。それも今では猿を見かけても動揺しないほど弘前の土地になじむことが出来ました。そんな土地をこの春で離れるのだと思うととても寂しい気持ちです。

大学生活を思い返すと、この4年間は全力でやりたいことを思い切りやりきった4年間でした。学科の授業も、実習も、部活も、もちろん遊びも、全部妥協しなくなかったので全てを全力でやりました。時には嫌になったり、投げ出したくなったりもしましたが、周りの人たちの支えがあって、全てを楽しくやりきることが出来ました。いつも近くで支えてくれた友人や、最後までご指導下さった先生方、沢山お世話になった学校の方々、そして自分のわがままに最後まで付き合ってくれた親には感謝の気持ちでいっぱいです。

春からは弘前の土地を離れますが、沢山の出会いを心の支えにして毎日楽しく、頑張っていきたいと思います。4年間本当にありがとうございました！

教育学研究科



思い出

学校教育専攻 工藤 七央

学部時代の4年間もあっという間でしたが、大学院での2年間も瞬く間に過ぎていきました。私の意思を尊重して進学を認めてくれた両親には大変感謝しています。この6年間、かけがえのない出会いがありました。また、研究や講義はもちろん、サークルやアルバイトなど、貴重な経験をたくさんさせていただきました。科室で友人と課題に取り組みながらつついとお菓子を食べすぎたこと、旅行や温泉へ行ったりしたこと、一つの目標に向かって共に頑張り達成感を味わったこと、子ども達と笑いあったこと、夜通し語り合い窓から見た朝日に驚いたこと、喜びや感動で胸がいっぱいになったこと、思い返せば本当に大事な思い出ばかりです。失敗ばかりで落ち込んでしまう日や自分に嫌気がさして逃げ出したくなった日もありましたが、そんな時、友人や先生方、先輩、後輩、そして家族が温かく見守り励ましてくれました。そしてそんな日があったからこそ、自分と向き合うことができました。この先も色々なことがあると思いますが、人とのつながりを大切に、感謝の気持ちを忘れずに、心を動かしながら走り続けたいと思います。皆さんも自分らしい時を歩んでください。

医学部医学科



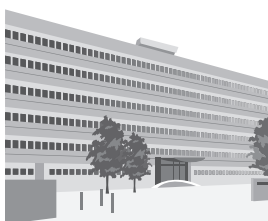
弘前大学を卒業するにあたって

医学科 小林寛太郎

6年前、厳しい受験に疲れ果てやっとの思いで入学できた弘前大学。東京から弘前に来て、空気の美味しさ、岩木山や桜の美しさに癒されたことを思い出します。今では第二の故郷となった弘前で、たくさんのかげがえのない思い出ができました。

教養科目で1年間だけ文京キャンパスに通い大学生らしい生活を送ったこと、オーケストラに入り演奏会に向けて一生懸命練習したこと、専門科目が始まり定期試験に向けて勉強に打ち込んだこと、鍛冶町を飲み歩きながらいろんな話をし笑い合ったこと、初めて患者さんと向き合うことに緊張した実習、そして国家試験に向けてお互い励まし合いながら合格を目指したこと。つらかったことや大変だったこともあったけれど、一人ではなく周りにみんながいたから頑張ることができました。クラスの友達、先輩後輩、先生方、両親、6年間関わった全ての人に感謝の気持ちでいっぱいです。

多くの人に支えられ、今ようやく医師としてのスタートラインに立つことができました。これからも日々精進し、頑張っていきたいと思います。



弘前大学を去るに当たって

医学科 寺内 泰観

私は先週、国家試験という学生最後のイベントを終え、弘前で6年間の学生生活もとうとう終わりを迎えようとしています。弘前で生活を振り返ってみると部活が生活の中心だったこと、6年を通して沢山遊んだことなど様々な思い出が湧き上がってきます。

私はラグビー部に所属して毎日のように練習に励んでいました。部活は入学当初に想像していたより大変で、生活の中心は常に部活であり、ラグビーの傍ら医学を学んでいるような感覚に陥っておりました。しかし6年間で東医体3連覇や準優勝2回など良い成績を残すことができ、引退した今でも懐かしくそして嬉しく思っています。何よりも部活を通して仲間たちと喜びや苦しみを共有できたことはとても良い経験でした。最後の青春だったと感じます。

他にも、花見、ねぶた、ねぶた、岩木山登山、温泉巡り、スノーボード、BBQ、旅行、徹夜麻雀、数え切れない試験の山など弘前で思い出は尽きません。

6年という月日はとても短かったです。日々の時間の大切さを身を持って実感しています。医師となつてからは学生時代よりも自分自身に使える時間は限られてくるのでより一層時間を大切に生きていこうと思います。最後になりますが6年間楽しく医学を学ぶことができたことを、弘前の地そして弘前大学に感謝申し上げます。

医学研究科



これまでとこれから

医科学専攻 佐藤 諭

2010年に弘前大学を卒業後、市中病院で3年間医師として研鑽を積み、2013年4月より大学院医学研究科社会医学講座の大学院生として母校に戻ってきました。医師国家試験に合格したものの現場での力量不足にひどく落胆した反動もあり、これまで目先の知識や技術の習得が中心になっていました。一方、医療全般のことをもっと広い視野でとらえることや、病気になる前に手を打つこと、すなわち予防医療の重要性を思い知ったことや、学生時代、陸上部でお世話になった中路重之教授から声をかけていただいたこともあり、社会医学講座の門を叩くことになりました。また、同時に助手という教員の立場も加わったため、自分で学ぶ一方、学生を指導する機会にも恵まれました。社会医学講座では、主に11年目を迎えた岩木健康増進プロジェクト健診や小中学校調査を通して、健康増進やそれに関連する研究を行い、なんとか学位論文を書き上げることができました。一方、被ばく医療プロフェッショナル育成計画にも所属し、原子力関連施設が数多く存在する青森県での被ばく医療活動も2年間行いました。4月からは再び医療現場に復帰しますが、今度は広い視野を持ちつつ、目の前の仕事をひとつひとつ大事にこなしていきたいと思います。



医学部保健学科



大学生活を振り返って

看護学専攻 前村奈緒美

私は10年20年後自分が年老いて振り返ったときに、大学生活がとても楽しく自分の人生に大きな影響があった時期だと感じています。私は看護師を目指して本学に入学しました。私は人見知りで、初対面の人に自分らしく接することが苦手でした。それを克服したくて大学1年生の後期から、接客業のアルバイトを始めました。様々な年代の人と触れ合うことは、看護師として働くうえでも自分のためになることでした。実習でも赤ちゃんから自分と同年代の方、年配の方と幅広い人と接することがあり、人見知りを改善していくきっかけとなりました。4年たった今では、入学時よりも人と接することが楽しく、自分自身も成長できたと感じています。大学では尊敬できる先生方や先輩方・友人・後輩と本当に素晴らしい出会いがあり、その出会いがより私を成長させてくれたと感じています。感謝しています。ありがとうございました。

今、卒業することを考えると、入学したのがつい最近のことに思えて不思議です。4年間はあっという間だったと感じます。最後に、後輩の皆さん、大学時代は人生の中でほんの一時かもしれませんが、自由な時間が多く自分のやりたいことに挑戦できるこの時を大切に、残りの学生生活を思う存分楽しんでほしいと思います。



大学生活を振り返って

放射線技術科学専攻 小野 愛広

私が弘前大学に入学してから4年が経とうとしています。入学する前の私には、大学生活に対する期待や不安など様々な感情が取り巻いていたと思います。そこから4年、4年と聞くと長いように感じますが、私にとっては短かったように感じました。私は高校までバスケットボールをやっていたのですが、大学ではやらないと思っていましたし、そもそもサークルにも入ろうと思っていませんでした。仮にサークルに入ったとしてもバスケ以外のものをやろうと思っていました。そんな中、あるとき友人に誘われてバスケをやったところ、とても楽しくて、結局バスケサークルに入りました。サークルに入ってから、いろいろな交流があり、友人ができて一気に大学生活が楽しくなりました。サークルに入って本当によかったと思いました。

この4年を振り返ると、たくさんの人に支えられてきたなと思います。私が不自由なく生活できたのは両親のおかげですし、辛いことがあったとき励ましてくれた友人、先輩、後輩、先生などたくさんの人に支えられてきました。そんな支えがあったから今の私があると思います。感謝したいと思います。大学生活で経験したことを今後の人生に活かして頑張っていきたいと思います。

保健学研究科



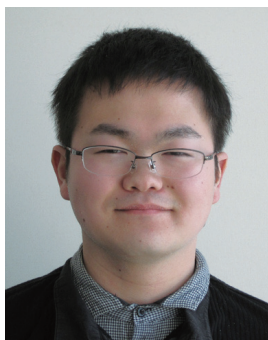
大学院進学について

保健学専攻 佐藤 拓弥

私は臨床検査技師として仕事に従事しながら、大学院に入学しました。仕事と研究の両立は簡単ではありませんでしたが、先生や職場の方のみならず様々な人に支えられたと思っています。お世話になった方々には感謝の気持ちでいっぱいです。私はもともと大学院に進学する気持ちがありましたので、一度就職した後改めて大学院に入学すると決めていました。今、振り返るとその決断は間違っていなかったと思います。実際に働いてみると仕事の中で分からないことや疑問点、問題点が出てきました。その時に大学院という新しい視点で取り組むことによって問題を解決することができ、自分にとって大きな力になったと思います。また自分が行った研究を他の人に分かりやすく伝える方法や論文の書き方など、今後臨床検査技師として活動していく中で必要な知識や技術を学ぶことが出来たのはとても大きな成果でした。私が助言できることは、就職か進学かで迷っている人はどちらかを諦めるのではなく、就職してからも大学院進学を目指してほしいと思います。大学院は自分の力をさらに伸ばす良い機会となるので、ぜひ挑戦してください。



理工学部



弘前大学への感謝

数理科学科 小松 侑司

無事に卒業を迎えるにあたってこの4年間の弘前大学生活を振り返ると、数学ばかりの生活だったと思います。なぜなら、大学で得た友人のほとんどが、一緒に数学を学ぶ中で得たものだったからです。とはいえ、普段から数学ばかりの私に、数学を通じての友人がこんなにも多く出来た、というのは自分でも驚いたことでした。もちろん数学科の学生なので、数学によって関わることは多いです。ですが、それだけでは友人関係とはなりません。少なくとも、私と数学科の多くの方々が学ぶ意欲を持っていて、一緒に数学を学んだからこそ、数学を通じての友人がこんなにも出来たのだと考えています。そして、私のやりたい勉強を継続的に努力できた大きな要因であったとも。

私は他大学の大学院への進学を選択しましたが、今後も弘前大学でのような周りとの協力を満ちた勉強をしていきたいです。弘前大学が、これからも学生の熱意にあふれた素晴らしい大学であり続けることへの願いと、私が、弘前大学での経験を活かしていくことをこの場を借りて誓うことで、この文章の終わりの言葉とさせていただきます。



4年間を振り返って

物理科学科 鳴海 諒洸

とても有意義な4年間だった。将来に向け高い志の下、勉強や課外活動に積極的に取り組む事ができた。幼いころに宇宙に魅せられてからずっと学びたいと思っていた宇宙物理学を専門とすることができた。この時間はものすごく幸せな時間だった。自ら学びたいと思える学問との出会いは自分自身を高めてくれる。後輩たちには1日1日を大切に、学びと向き合って欲しいと思う。

卒業するにあたり、苦しい時期を共に切磋琢磨し合い乗り切った仲間たちに感謝したい。彼らとの出会いは素晴らしいものであったし、ともに学べたことは何よりの財産である。さらに物理科学科の先生方はじめ、就職活動時の支援室の先生方には多くのことをご指導していただいた。おかげで楽しく学ぶことができ、将来前向きに歩んでいくための自信がついた。そして何よりこれまで全ての点で支えてくれた両親に感謝したい。ありがとう。

これから社会人の一人として、弘前大学で学んだこと、経験したことを十二分に活かして日々精進していく。



やりたいことができて

物質創成科学科 中川 雄太

振り返ってみると4年間は、あっという間に過ぎてしまいました。たくさんの新しい発見があり、非常に良い経験ができたのではないかと思います。

特に、3年生の後期から卒業までのこの期間は大学生活で一番印象に残っています。3年生の後期から研究室の仮配属システムが導入され、私は希望通りの研究室に配属することができました。仮配属が決まってからは時間を見つけて、研究室に行き、実際に実験をさせてもらったり、先輩方の実験を見学したりしていました。先輩方の実験している姿は、とてもかっこよく見え、私も早く実験をしたいといつも思っていました。

4年生になってからは、自分の研究テーマをもらい、実験を行っています。失敗することもあります。試行錯誤し、上手くできた時には、思わずガッツポーズをとってしまいます。実験している時間はとても幸せで、だれも合成したことがない物質を合成することは「ロマンです!!」

実験ばかりの日々ですが、充実したものになっているのではないかと思います。

自分があこがれ、やりたいと思ったことができる日々は素晴らしいと思います。皆さんもやりたいことを見つけ、それが実現できるように頑張ってください。

農学生命科学部



大学生活を振り返って

生物資源学科 小館 めい

弘前大学に入学してもう4年が経とうとしています。入学当初大学生活を楽しみに思うとともに沢山の初めての不安でいっぱいだったことを懐かしく感じます。

この4年間、私は多くのことを学び、経験しました。家族のありがたみを改めて感じた一人暮らし、沢山の思い出ができた友人との日々、振り返ると様々なことが思い出されます。その中でも印象深い出来事はマナー講座TAとして活動したことです。講座運営や指導のことで悩みくじけそうになることもありましたが、同期メンバーや先輩、後輩に何度も支えられ3年間TAとして受講生が満足できる講座を作り上げることができました。この4年間で得たものは多く、大きく成長することができたと思います。

楽しいことも辛いこともあった充実した4年間を送ることができたのは友人たちや後輩・先輩、先生方そして温かく支えてくれた家族がいたからだと思います。弘前大学に入学して、生物資源のみんなと出会えて本当に良かったと思います。4月からは弘前大学大学院に進学します。大学院生活も成長できるものにしたいと思います。お世話になったみなさんに心から感謝します。



大学生活4年間を振り返って

園芸農学科 相馬 澄佳

弘前大学に入学してから早くも4年が経過しました。これから始まる大学生活に期待と不安が入り混じる複雑な心境で校門をくぐったことを今でも覚えています。この4年を振り返ると、充実した価値ある時間であったと確信しています。

学習面では、高校とレベルの違う大学のカリキュラムに対応するのが大変でした。実習の多い農業高校は普通高校に比べ基礎科目の学習範囲が少ないです。そのため入学後は先輩や友達に教えてもらいながら必死に勉強しました。単位習得は苦戦しましたが、多言語や心理学、農生の専門科目などは新たな学びが沢山あり楽しかったです。

また、在学中は何事に対しても「挑戦」することにしました。アルバイト、震災地への訪問、自動二輪免許取得、岩木山登山、教員免許取得、就職活動、ミスりんごへの応募などです。様々な体験を通して、「成長」と素敵な「出会い」がありました。

大学に入って、互いに夢を語る友人や、沢山のご指導をして下さった恩師と出会えたことが財産です。大学に通わせてくれた家族にも感謝しています。これからはより一層、りんご産業の発展に貢献したいという夢を実現させるために尽力したいです。



大学生活を振り返って

地域環境工学科 町田 康貴

卒業を手前に大学生活を振り返ると、本当に様々なことがあった。今では第二の故郷となった弘前も、関東から来た私にとっては何も知らない異郷の地であった。4年前、私は少しの期待と多くの不安を抱え、弘前で新たな生活を始めた。生まれてから高校を卒業するまで同じ土地で育ってきた私にとって、知り合いの全くない環境での1人暮らしは大変心細いものであった。何をすることも自分で考え行動していかななくてはならない。そんな当たり前の事に苦勞し、自分がいかに他人に甘えて生活してきたのかを痛感させられたことを覚えている。

今思うと、この4年間の大学生活は自分を大きく変えてくれたように思う。多くの人たちと出会い、様々なことを学んだ。友人の大切さ、両親のありがたさにも気が付いた。楽しいことばかりではなく苦勞したことも多々あったが、その1つ1つの経験が私を成長させたように感じる。

最後に、先生方、先輩・後輩、同級生の方々、その他多くのお世話になった方々、本当にありがとうございました。皆様のおかげで充実した大学生活を送ることが出来ました。4月から社会人として新たな生活が始まります。不安はありますが、この4年間で培った経験を活かし、励んでいこうと思います。



人文学部



亀尾利夫先生のこと

人文学部 教授 田中 岩男

勤めが長くなると勢いお世話になった人の数も多くなる。数えてみると、学部長だけでも11名に上っている。人の上に立つだけあり、それぞれ個性的な忘れ難い面々であるが、ここでは最初にお世話になった亀尾利夫先生のことを記しておきたい。

1975年春のこと。着任の諸手続きで庶務課にいと、夕刻、やはり4月に学部長に就任したばかりの先生が帰りがけに立ち寄られた。愛用の中折れ帽を被り鞆を下げた端正な姿の先生は、私を見つけるとつかつかと歩み寄ってきた。困惑する私をよそに、おもむろに鞆から一冊の洋書を取り出した先生は頁を繰ると「このドイツ語がどうもすっきり解らないのですが」と尋ねてきた。直前まで研究室でその個所と格闘していたらしい。すぐに詳しくコンテキストを説明し始めた。

その時の質問内容も、それに対しどう答えたのかも、まったく憶えていない。が、学生同然の私にまで謙虚に教えを乞おうとする姿は、真理を追究する学究の姿勢として鮮烈に印象づけられた。東京で二年の修士課程を了えただけで助手として母校に舞い戻った私は、恩師たちばかりに囲まれ、いつ無知が暴かれるかと緊張のし通しだったが、この時ずっと肩の力が抜けるのを覚えた。真理に対して恥じるべき無知などない——知の先達から受けた洗礼であった。

学部長としての先生の統率ぶりも水際立っていた。教授会ではもっぱら聞き役に徹してほとんど口を開かない。冷静で辛抱がよく、熱したり、まして激するということがない。うるさ型の長老たちにも十分に発言させ、結局、議論は先生の一言で落ち着くべきところに落ち着いている。40代の若さで要職に就かれた事実にも人望の厚さはうかがわれたが、その沈着さ、的確な判断力、そして強靱な意志はどこからくるものなのか……。

珍しい苗字ゆえ最初から気になっていたが、かの亀尾英四郎が御父君だと漏れ聞いたのはいつ頃のことだったか。岩波文庫にも収められたエツケルマン『ゲエテとの対話』の訳者で『ゲエテと独逸精神』の著書もある著名なドイツ文学者である。ゲーテ研究者の端くれとして、色々お話を伺いたいと思いながら機を得ぬまま、先生は学部長就任の年『デューイの哲学——知識と行為』を世に問うと、2年後の春東京の大学へと去られた。その先生と、ほぼ20年後、例のエツケルマンを機縁に思いがけぬ「再会」を果たすことになる。

日本における過度に理想主義的なゲーテ受容が気になり探っていた私は、「熱烈なゲエテ信奉者」亀尾の存在とも改めて向きあうことになる。例えば召集された武良茂青年（のちの水木しげる）が心の支えに「暗記する」ほど何度も読み返し、「雑嚢に入れて南方まで持っていった」のが岩波文庫の亀尾訳『ゲエテとの対話』三巻だった。資料を渉猟していた私は、しかし、衝撃の事実の前に立ちすくむ。終戦間もない昭和20年10月、東京高校ドイツ語教授亀尾英四郎は食糧統制下、闇を排して配給のみで食いつないでいたが栄養失調で倒れ、不帰の人となっていた。当時の新聞報道によれば、あとには「操夫人との間に東京高校文乙二年の長男利夫君以下六人」の遺児が残された（跡を追うように夫人も2か月後「衰弱死」している）。当時「利夫君」18歳、末子は3歳である。死という厳粛な事実を前に私はたじろいだ。氏の「ゲエテ信奉」とそれは関係があるのかないのか——そう問うことさえ、人間の内面に土足で踏み込むような、不躰で軽薄な傲りと感じられた。

資料の一つ、御両親の五十回忌を機に末子の^{あきら}覚氏がまとめた『亀尾英四郎・操関連報道・記事集』を繰っていた私の目は、そこに収められた一葉の写真に釘付けになる。不幸の翌年に撮られたと思しき写真の中央には、幼い弟妹たちに囲まれて「利夫君」が座っている。慈父のように穏やかな、靱い意志の光をたたえたその眼は、紛れもない先生のそれであった。

（本学附属図書館所蔵の『亀尾英四郎全集』全二巻（私家版、2007）を編集・寄贈された覚氏は中学卒業までを社会福祉法人・東京育成園で過ごした後、当時教育学部野辺地分校に赴任していた長兄を頼って来県し、県立野辺地高校、さらに本学文理学部理学科を卒業されている。先生御夫妻が文字通り「親代わり」であった。）



在職中の思い出

教育学部 教授 鎌田耕太郎

赴任した頃は、今のように学生に研究室所属向けガイダンスの制度がなく、特に自分の仕事内容の宣伝や勧誘をしなくともたくさんの学生が集まった。週一回の野外実習や集中授業の地質巡検、卒論調査に同行した野外調査は講義室での授業より楽しく、夢中で学生と議論できた。当時の学生はすでに40歳代であるはずだが、つい私の思い出の中では彼らも私も当時のままで登場してしまう。かつての共通教育で開講した「生きている地球」や、地域生活専攻学生対象の「地球環境史」でのトピックとストーリーには、学生からの期待や満足度が感じられ、やりがいがあった。

UTMへの交換教授としてテネシー州の田舎町で過ごした4か月は米国の大学の組織や運営、講義、学生の生活のようすなどの教育事情を生で知ることができて貴重な体験であった。国際交流部の同僚が誘ってくれたワシントンDCへの車での旅行は、途中、合衆国建国の史跡をたどりながら米国東部の現状も見聞できた。シェナンドアの自然、アメリカの物量、後戻りの無いエネルギー性格、合衆国成り立ちのカラクリなどの複雑な歴史事情の一端をも実感できた。最後に長い間、研究と教育の機会を与えていただいた大学に感謝する。



弘前大学を去るにあたって

教育学部 教授 面澤 和子

昭和53（1978）年4月に弘前大学養護教諭養成所（3年制）に着任し、養成所の教育学部養護教諭養成課程への移行に伴い、移籍しました。平成6（1994）年度に大学院教育学研究科養護教育専攻（修士課程）が設置されました。

東北地方唯一の教育系大学の養護教諭養成機関としての自覚を持って、健康教育分野から教育、研究に当たってきました。

研究面では平成5年から3年間、教育学部の先生方と共に、姉妹大学テネシー大学マーチン校の特別支援教育専門の先生方と共同研究を行い、交流を深めることができました。また平成8年10月～翌7月に在外研究制度で米国コロラド大学の客員研究員となり、研究を広げる良い機会になりました。平成17年度から3年間、弘前大学教育学部附属養護学校（平成19年度～附属特別支援学校に改称）の校長を務め、特殊教育から特別支援学校への移行期にあたり、学びの多い期間でした。

38年前の2月、初めて弘前大学を訪れた時は大雪で、旧弘前駅舎の大きなつららを見てすぐに帰りたと思いました。素晴らしい先生方と出会い、共に教育、研究ができたことは幸せでした。この間、弘前のゆるやかな時の流れと街並、青森の自然と共に人生の主要な出来事に出会い、過ごしてきました。昨今、大学の環境は一層厳しさを増していますが、先生方のご健闘と弘前大学の発展を心から願っています。



生みの親、育ての親

教育学部 教授 平岡 恭一

教育学部学生として4年間在籍し、その後同じ研究室に25歳の時から今まで40年間勤務しました。計44年間ですから、まさにこれまでの人生の大半を弘前大学で過ごしたと言えるでしょう。これは歴代最長不倒距離ではないかもしれませんが、k点は超えていると思います。学部学生の時に先輩の影響で大学院（広島大学）進学を志したので、弘前大学はいわば私の大学教員生活の生みの親とも言えましょう。また、大学院博士課程1年を終えたばかりで、弘前大学に助手として採用された時は25歳で、同時に赴任された30歳前の先生に「若いねー」と驚かれました。学部生の時に一年後輩だった学生が留年してまだ残っていたりして、学生気分半分のスタートでした。本当に何もわからない状態から先生方や事務方の皆さんにいろいろご指導いただいたわけですので、まさに弘前大学は、育ての親と言えましょう。またよい学生に恵まれ、学生の皆さんにも育ててもらったと感じております。親の恩に報いるようなことは何も形に出来ませんでした。生んでくれてありがとう、育ててくれてありがとうという感謝の気持ちと共に終わることが出来るのは幸せなことだと思っております。

医学研究科



弘前ヘアレスラットを反面教師として

医学研究科 教授 土田 成紀

この3月末をもって定年退職することになりました。教授になって以来22年、医学部入学から数えると47年を、学生として、また、教員として人生の大半を弘前大学で過ごしてきました。入学した昭和44年は、学生運動が激しく、授業ストライキが行われ、専門課程への進学が夏以降に延期されるなど、激動の時代でした。医学部草創期の教授が、何も無い中をいかに苦勞し、現在に至っているかを聞き医学部を卒業したのでした。大学院は、新しい切り口から研究をしたいと考え、新設間もない佐藤清美教授の生化学第二講座に進みました。それ以来、がんを早期に検出することや遺伝性の毛のないラット（弘前ヘアレスラット）の原因遺伝子を見つける仕事を行ってきました。このラットでは、免疫抑制に働く制御性T細胞が減少していること、その減少はLy49遺伝子の欠損によることを明らかにできました。Ly49は正常なラットでは樹状細胞に発現し、白血球型である主要組織適合抗原を認識します。この白血球型はT細胞に発現しており、個体の違いあるいは自分と他を区別する分子です。自分をアピールする分子がT細胞にあっても、それを発見、識別する分子が樹状細胞になければ、T細胞は制御性T細胞になれません。この結果は、樹状細胞を教員に、T細胞を学生にしてみると理解しやすいと思います。自らの教員としての学生との関係を考えると、冷や汗が出る思いですが、自戒を込めて、あるべき教員と学生の関係として今後の人々に期待したいと思います。弘前大学の益々の発展を祈ります。



弘前大学ありがとう

医学研究科 教授 高井 良尋

26年間の東北大学勤務の後、弘前大学に2010年5月に赴任してから、早6年が経過し今年3月に定年退職することになりました。6年という限られた時間でありましたが、教室員の皆様、学内外の先生方、友人に支えられ、私にとって非常に充実した日々でありました。

最もうれしかったことは、学生時代に放射線科学に興味を持ってくれ、6年間で9人の新人の先生方が教室に入ってくれたことです。次に、教室員全員がリサーチマインドを持って、臨床ばかりではなく研究にも真剣に取り組んでくれるようになり、おかげで、ここ5年間でこの規模の教室でも16件の科研費を新規に獲得することができたことです。皆さんそれぞれ、自慢できる放射線治療医、放射線診断医に育てくれました、本当にうれしく、また皆さんの頑張りに感謝しております。

弘前大学放射線科に関わりのあった先生方のほぼ全員に喜んで頂けると思われそうです事を在職期間最後にご報告できるようになりましたことは、私にとって望外の喜びであります。私が赴任した際の最大の目標は放射線科を二つに分割し、放射線治療学講座と放射線診断学講座と独立した講座を作ることでしたが、この度、医学部教授会全会一致での後押しを頂き、放射線診断学講座の新設に関して学長先生に認めて頂きました。本当にありがとうございました。

今、振り返ってみて、弘前大学に赴任させて頂くことができ本当に良かったと、心より感謝しております。弘前大学ありがとうございました！！





走ること

理工学研究科 教授 深瀬 政秋

ありがたいことに学科の同僚に最終講義の場を設けてもらえることになり、研究面についてはそちらで引導を渡せるので、この紙面は研究の息抜きについてお話させていただきたいと思います。と言っても、皆さんの預かり知らぬ私生活ではなく、自分が学内に在ってどのように煩惱を調節したか、ということです。私の場合は昼休みに走ることでした。朝が早いので、昼頃にはどうしても頭の中が疲れてきます。それで、昼休みの走りは大事なルーチンでした。30の頃に、足腰を鍛え鍛えて癌で死に、という川柳を新聞で見ましたが、健康面で云うなら私の走りは過ぎたるはなお及ばざるが如しの類です。人間ドックで試しに聞いても、医者は適当に言葉を濁します。とにかく、私の場合は健康志向で走る訳ではなく、やはり精神面です。ただ、一人気ままに走るとなるとどうしても街中を通して、人の目に触れざるを得ません。今でこそ走るのには手軽な運動のように言われますが、昔はそういうのは変わり者に見られていて、その感覚が身に付いているため、昼休みに学内を出たり入ったりするのは恥ずかしいものです。そうは言うものの写真はごらんの通りです。これは遠藤学長の前で走っていた頃のもので、弘前大学走友会の証なので、取えて出します。この冬は根雪になるのが遅くて、これが弘前の最後の走りかと思うことしきりでした。年が明け定年目の今は、たそがれにまださめやらぬほてりあり津軽の道を走り続けて、というところですよ。20数年間のご厚情に感謝申し上げ、皆々様の武運長久を祈ります。



定年退職にあたって

農学生命科学部 教授 大町 鉄雄

平成3年8月、弘前大学農学部に着任して以来、長いようで短かった24年8か月、「遂に来た」「やっと来た」の定年退職、多くの先生と事務の方々には大変お世話になった。この間、学部改組によって、所属は生物資源科学科から、農学生命科学部応用生命工学科、そして現在の分子生命工学科に変わった。特に、平成9年10月の農学部、理学部・生物学科、教養部（一部）が一緒になった改組では、学部間の交渉、学科を越えた先生方の移動の調整など大変であったことを覚えている。大学そして学部が良くなるための改組、仕方がないことである。そして、平成28年度に組織改革を伴う大改組が行われるが、その直前に弘前大学を去ることになった。皆に「良い時期に辞めるんですね」と良く云われる。私もそう思う。しかし、改組の成果を見届けることができないのが残念である。

弘前に赴任する前に恩師志村憲助先生から「今よりは良くなるだろうから、置かれた環境の中で出来ることをしなさい」と云われたことを思い出す。環境の中での出来ること、また、その環境とは何であろう？ F. Sangerがあの有名な総説（1988年）の中で、“研究室の活動・活力は研究室の雰囲気によることが大きい”と述べている。雰囲気こそが環境であり、その中で出来ること（実験、研究、その他）をするのである。その環境は自分でまた周りの人々（特に学生達）と一緒に作り上げなければならないのであった。結局のところ、何もしなかったし、できないままに辞めることになった。

最後に、弘前大学と農学生命科学部に何も貢献しなかったにも拘わらず、好きな研究・実験を学生達と一緒に続けさせて頂いたことに感謝しております。弘前大学の更なる発展を心から願っております。

北日本新エネルギー研究所

城下町弘前での教育・研究16年間を振り返って

北日本新エネルギー研究所 教授 古屋 泰文



1999年春、新設の理工学部・知能機械システム工学科の教授として着任し、2013年から北日本新エネ研（青森キャンパス）で勤務しました。長い積雪のためか、赴任時ホテルの窓からの薄茶色にさび付いた土手町街の屋根が多いのが気になりましたが、その後の連休のお城での眩いばかりの桜と岩木山のコントラスト、笛太鼓の花見の賑わいに触れて、明るい気分となったことを鮮明に覚えております。夏ねぶた、秋紅葉と菊人形、冬の雪灯籠まつりや周囲の温泉

探索を通して、この津軽地域の四季と風土に癒され、多くの先生と事務職皆様のご支援で教育（学生育成）と研究活動に集中出来ました。

理工学部の岡崎禎子先生（退職者）ほか、他学部を含む先生方と新素材開発とその機能デバイス設計・試作で10以上の産学プロジェクトに携わり、その中でも、のべ80余名の指導学生（学部生、院生）全員が誰一人、留年も退学もなく卒業・修了しております。教員側と学生間でのホットな研究討議と学生の資質・“取り柄”を見出し叱咤激励し、“決して見捨てない”モットーが効果を発揮したと感じております。

2011年に開発に成功し、工場量産化まで目途を付けた磁場中伸縮する磁歪FeCo系合金（弘前大基本特許）は、今後、各種デバイス実装へと展開が期待されており、引き続き本学メンバとも共同研究を希望しております。また、学内では、新技術の地元応用展開や先端技術の“影”（＝内在危害因子）の総合的分析も取り入れた“学部横断型グローバル連携研究会”、その発展形として、産学官・地域連携・雇用開拓を目指す“津軽海峡エリア連携・活性化シンポ”を実施することが出来ました。

最後になりますが、弘前大学教職員皆様の16年間にわたるご支援・ご協力に感謝し、また、北日本・北東北での特徴を生かして、“知と人材育成の拠点校”、「世界に発信し、地域と共に創造する」弘前大学の発展をお祈りし、退職の挨拶とさせていただきます。

食料科学研究所

定年退職にあたって

食料科学研究所 教授 嗟峨 直恆



一昨年、北海道大学を定年退職、縁があり弘前大学にお世話になり、早2年経ちました。学位取得後、日本学術振興会奨励研究員を皮切りに、これまで三十数年に亘り海外を含め7箇所での産学官各界の職種を経験するという、慌ただしい人生でした。

弘前大学では、新設の食料科学研究所の立ち上げのお手伝いをさせていただきました。本研究所では「Farm to Table：食の総合プロデュース」をモットーに、北日本食の成長戦略の基、青森県の農林水産物の高機能性付与・ブランド化による地域振興や国際貢献につながる活動が始動しつつあります。

この「学園だより」が皆様のお手元に届く頃には、北海道新幹線が開通し将来的には青森と道南を最速30数分で結びます。弘前・青森・八戸・函館等の津軽海峡圏の街と街が通勤圏内になり、これらの街の総合人口は100万を超え、仙台や札幌にも負けない、有力な経済圏の樹立が展望できます。この津軽海峡圏の諸都市を繋ぐ産学官金連携の中核的拠点として、弘前大学が重要な役割を担い、益々発展されんことを祈念します。

私の職業人としての晩年を山紫水明、海の幸・山の幸の豊かな青森県で過ごすことができたことは、僥倖でありました。最後に、これまで種々とお世話になりました弘前大学の教職員の皆様に心から厚く御礼申し上げ、退職の挨拶とさせていただきます。



退職にあたって思うこと

看護部 看護師長 中嶋 裕子

1976年4月に弘前大学医学部附属病院看護部の職員に採用され、今年3月に定年退職を迎えることになりました。

初めて配属された消化器外科、泌尿器科、脳神経外科と約14年間の病棟勤務経験を得て中央部門に配置異動し退職に至ります。外科領域での病棟勤務では患者様が手術後に笑顔で退院していく姿が本当に励みになりました。

当時、中央部門の手術部・集中治療部・救急部は一つの看護単位のためスタッフ人数が院内では最大、毎日の術式勉強、医療器械・監視装置に苦労したことも良い思い出の一つ、手術等の勉強に付きあって頂きましたスタッフの皆様には本当に感謝でいっぱいです。

2000年3月に新中央診療棟が完成、手術の実施と並行しながらの手術部移転の困難、移転後の問題山積等を乗り越えられたのは皆様からの支えあってのことでした。東日本大震災では材料部の一部装置が電力上使用制限にも関わらず大きな混乱を招くことなく診療支援ができたことを、スタッフ共々安堵したことを思い出します。

このように多くのいろいろな職種の方々と仕事ができたと私が私を支え成長させてくれました。長い間本当にありがとうございました。



今までとこれから

看護部 看護師長 成田 幸子

弘前大学医療技術短期大学部専攻科助産学特別専攻を終え、大学病院旧3病棟4階（産婦人科病棟）に助産師として配属された。その時は、退職まで助産師として勤務するものだと思っていたし、助産師として採用されたからには、それが

当たり前だと考えていた。

助産師としての勤務は、生命の誕生の瞬間に立ち会う事ができる喜びと、正常に経過して当たり前と言われる分娩が、母体・胎児共に急変する可能性と、分娩介助をしながらレスピレーター管理の入院児等の看護をするという緊張の日々でもあった。

五つ子ちゃん、捨て子、多量出血できた患者は子宮には胎盤が……事件ですなど、さまざまな事があった。

病棟移転で、妊産婦さんの移動、物の配置など、大変ではあったが楽しい日々でもあった。

恐い先輩がいた。その先輩にしっかり教えて頂いたからこそ、今の自分がいる。

その後、思いがけず勤務交替し、5部署を経験し、2013年に第二病棟3階に再勤務する事になり、現在を迎えている。残念な事に？分娩介助はしていないが。

定年退職の年を迎えたという実感がなく、今後の人生設計もなく、私はまだ漂っている状態で、退職の日を迎えようとしている。



各研究室をクローズアップ!

人文 文化財論研究室 教授 関根 達人



2015年福井県敦賀市での石造物調査 (写真1)

はじめに

人文学部は2016年4月から人文社会科学部として生まれ変わります。それに伴い、これまで人間文化課程にあった文化財論コースは文化創生課程の文化資源学コースに編成されます。

文化財論研究室は、私が弘前大学に着任した2001年に開かれました。文化財論コースには日本考古学・西洋考古学・日本美術史・西洋美術史・宗教学・民俗学など文化財を扱う研究室があり、文化財論研究室は、それらの学問を連携・横断することを目指して活動してきました。

この度、平成27年度弘前大学特別学術賞（遠藤賞）を受賞することができました。これまで私共の研究に協力してくださった関係者の方々ならびに過酷な調査に参加し、研究の基礎資料となる報告書作りに携わった学生の皆さんに感謝申し上げます。ここでは、研究室の活動、今回受賞対象となった「中近世の蝦夷地と北方交易に関する研究」、そして私たち考古学者の「お仕事」について紹介させていただきます。

1. 文化財論研究室の活動

私たちの研究の目的は、文化財を通してそれを生み出した過去の社会を復元し、そこから現在・未来へと繋がる「生きる知恵」を探し出すことにあります。人と自然が作り上げてきた文化財は、白神山地のようなものから土偶のようなものまで非常に多様です。文化財論研究室では、人の手により作られた有形文化財や人が大地に残した生活の痕跡を主な対象として研究を行っています。生

の資料から新たな歴史を解き明かすことに喜びを感じてもらうため、文化財論ゼミナールに所属する学生には、基本的には今まで誰も調べたことがない、新しく見つけ出した資料を扱ってもらっています。本やガラスケース越しでなく直に本物の資料を扱うことで、モノからより多くのことを学ぶことができるのです。そのため、国宝や重要文化財に指定されているような資料とはあまり縁がありません。むしろ「道端に転がっているようなモノ」の中から歴史的に重要な事実を導き出し、それらに文化財としての価値づけを行いたいと考えているのです。

研究室ではこれまで、北海道・青森を中心に、お寺の過去帳・墓石・飢饉の供養塔・昔の仕事着・神社の奉納品・中世の山城など様々な文化財を調査してきました。2015年からは、「石造物研究に基づく新たな中近世史の構築」というテーマで、日本海交易をとおして北日本とも深いつながりがある福井県内の港町で、墓地や神社の境内にある中世・近世の石造物の調査を行っています（写真1）。

2. 「中近世の蝦夷地と北方交易に関する研究」

現在日本が抱えている政治的課題のなかに、先住民であるアイヌの人たちに対する偏見や差別の問題と沖縄の基地問題があります。この二つの問題の背景には、日本という国家がこれまで歩んできた内国化という歴史が横たわっています。日本の南北極にあるこれらの課題は、現地（北海道・沖縄県）とそれ以外の都府県とで温度差が著しい点も共通しています。

昔、アイヌ民族の土地であった場所は、歴史上「蝦夷地」[北海道・旧樺太(サハリン)・千島(クリル)]と呼ばれていました。蝦夷地は、中世・近世日本の国家領域の周縁部にあたります。本研究では、中世・近世の多様な考古資料や古文書・絵画資料などを駆使して、津軽海峡や宗谷海峡を越えたヒト・モノ・情報の実態を明らかにし、「蝦夷地」へ和人がいついかなる形で進出したか、和人や和産物(日本製品)の蝦夷地進出がアイヌ文化の形成と変容にどのような影響を与えたか、蝦夷地の内国化がどのような形で進出したかなどについて検討しました。

江戸時代までは、弘前大学のある青森県内にもアイヌの人々が暮らしていました。弘前藩やその当時下北を領有していた盛岡藩は、領内に異民族を抱える「多民族藩」だったのです。本研究では彼ら本州アイヌの生業を例に、日本国内経済圏へ取り込まれることで、アイヌの生業は、動物性の油・皮革・熊の胆やオットセイなどの薬材といった和人の求めに応じて、次第に特定の狩猟・漁撈に専門化し、和人との交易を前提とした社会へと変容したことを指摘しました。

アイヌ社会に受容された和産物(日本製品)では、生業や日常生活に不可欠な鉄素材・鉄製品とともにアイヌの人々が宝物とするような刀・鎧・漆器などの「威信財」と酒・タバコが常に大きな比重を占めていました。

威信財のなかでも特に刀は重要で、何か問題が起きた際に賠償や担保になりました。刀はアイヌ社会の集団関係や和人と関係性を維持・保障する重要な役割を果たしていたのです。一方、酒とタバコは、松前藩や幕府、蝦夷地交易に携わる商人によって、アイヌ支配の道具として利用されました。アイヌの人たちは和人によって「酒とタバコ漬け」にされていたのです。

また、本研究では、アイヌの人々が使わなかった陶磁器類や石造物を通して、蝦夷地へ和人が進出した過程を復元しました。その結果、北海道の日本海沿岸部へは18世紀頃から海産物を求めて多くの和人(民間人)が進出したのに対して、太平洋側へ和人が本格的に進出するのは、ロシアとの緊張関係が高まった19世紀であり、主に北方警備を担った幕府や東北諸藩の武士が多かったことが分かりました。

3. 考古学者の「お仕事」

学生や一般の方を前に、自分の歴史研究の方法について話をする際、刑事事件や医療に例えます。

歴史研究が刑事事件だとすれば、古文書を扱う研究者や聞き取り調査を行う民俗(民族)学者は、取調室で容疑者や関係者から事情聴取し、事件現場周辺で聞き込みを行う「刑事」です。我々考古学者は、現場検証を担当し、現場や関係箇所から押収された物的証拠に基づき犯行の具体像を浮かび上がらせる「鑑識」ということになります。

刑事事件に刑事と鑑識の両者が必要なように、歴史研究も多角的な立場から進める必要があります。刑事事件では容疑者の自供が得られた場合でも、自供を裏付ける物的証拠が必要とされます。同じように、歴史研究では事の詳細を伝える古文書や証言が存在する場合でも、それらにウソや誤解がないか、「モノ資料」によって検証する必要があります。刑事事件で容疑者が黙秘している場合に鑑識の役割がより重要になるように、古文書や証言が乏しいケースでは我々考古学者が大活躍しなければなりません。

まさにアイヌ文化はそうしたケースに当てはまります。関係者(和人)からの供述(古文書)は得られても肝心のアイヌの人々は文字を使わず、黙したままです。また18世紀以前のこととなると、関係者の供述も少なく曖昧です。考古学者が「物証」を探し出さなければ、この「難事件」は解決しません。

歴史研究を医療に例えるなら、古文書を扱う研究者や聞き取り調査を行う民俗(民族)学者は「内科医」や「放射線技師」・「薬剤師」で、発掘調査を行う我々考古学者は「外科医」と言えるでしょう。体への負担を考えできるだけ手術は避けた方がいいように、破壊を伴う発掘は歴史研究でも最終手段といえます。しかし手術でしか治し得ない病があるように、発掘でしか分からない歴史が存在することも事実です(写真2)。



2011年北海道北斗市矢不來館跡の発掘調査(写真2)

各研究室をクローズアップ!

感染生体防御学講座 医学研究科

教授 中根 明夫



研究室メンバーの集合写真

1. はじめに

この度、平成27年度弘前大学学術特別賞（遠藤賞）を受賞することができ、とても光栄に存じます。遠藤先生にあやかり、研究者として遠藤賞受賞の栄誉を夢見て来ましたので、喜びはひとしおです。もちろん、この受賞は私一人の力ではなく、研究室のスタッフや大学院生が一丸となって研究を推進してきた賜ですので、研究室のメンバーに深く感謝しています。

研究室紹介の機会をいただきましたので、研究室と研究について紹介させていただきます。

2. 研究室紹介

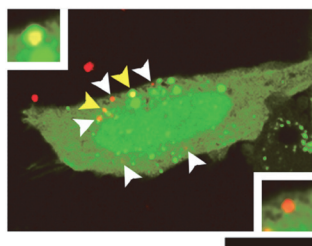
私の所属する感染生体防御学講座は、細菌学講座と寄生虫学講座が統合され、平成18年10月に誕生した新しい研究室で、今年で創立10周年です。現在講座のスタッフは、浅野クリスナ講師、小野久弥助教、成田浩司助教（医学研究科附属動物実験施設）、廣瀬昌平特任助手に私を加えた5名です。教育面では、細菌学、ウイルス学、寄生虫学、免疫学という基礎医学の広い領域をカバーしています。

研究面では、講座の名称のように「感染症」とそれに対する「生体防御」の研究を行っています。感染症の対象としては、免疫能が低下した人を襲う「日和見感染症」で、その病原体であるリステリアと黄色ブドウ球菌の研究をしています。特に最近では、多くの抗菌薬に耐性を示すMRSA（メチシリン耐性黄色ブドウ球菌）として医療関連・市中感染症の大きな問題となっている黄色ブドウ球菌感染症の研究に力を入れています。その研究については次項で紹介します。

一方、「肥満と免疫」の研究プロジェクトも進めています。肥満は現代社会の大きな問題で、さまざまな生活習慣病の原因となることが知られています。最近、肥満者の脂肪組織には炎症細胞が集積し、肥満者は免疫学的に軽い炎症状態にあることが明らかとなっています。肥満が原因で2型糖尿病に発展する可能性が高くなりますが、糖尿病患者は感染症のリスクを負います。私たちは糖尿病に至らずとも肥満自体が免疫系に影響すると考え解析を進めた結果、肥満状態が免疫応答を抑制する傾向にあることを突き止め、その詳細なメカニズムを解明しているところです。また別の研究プロジェクトとして、幹細胞による炎症性疾患の治療の可能性について研究しています。幹細胞はさまざまな細胞に分化する能力をもっています。私たちは、脂肪組織由来幹細胞をマウスに投与すると劇症肝炎や毒性性ショックが予防出来ることを明らかにしました。そこで、さまざまな炎症性疾患への応用とその作用メカニズムの解明に取り組んでいます。

3. 受賞対象の研究紹介

黄色ブドウ球菌は傷口の化膿や褥瘡などの皮膚感染から肺炎、敗血症など重篤な深在性感染症まで起因疾患は多岐にわたります。その一方で、感染症を引き起こさず皮膚、鼻腔、咽頭、腸管などに常在し、持続感染を起こすといった変幻自在な細菌です。黄色ブドウ球菌は病原因子としてさまざまなタンパク性毒素を分泌しますが、その代表はブドウ球菌エンテロトキシン（staphylococcal enterotoxins:SEs）です。SEsは23種からなるSEファミリーを形成しています。SEsはヘルパーT細胞に分化するCD4陽性T細胞をoligoclonalに活



上皮細胞のオートファゴソーム内外に存在する黄色ブドウ球菌（赤色）

20 μm

活性化し炎症を惹起する「スーパー抗原」であると同時に嘔吐誘導活性をもち、ブドウ球菌性食中毒の原因にもなります。たとえば、TSST-1 (toxic shock syndrome toxin-1) は嘔吐誘導活性を有せずスーパー抗原に特化した毒素で、全身性炎症疾患である毒素性ショック症候群を引き起こします。一方、SEAは食中毒に加え、黄色ブドウ球菌感染症の炎症病態に関与します。私たちはSEファミリーの中からTSST-1とSEAに着目し、以下の研究成果を挙げてきました。

(1) TSST-1によるオートファジーの調節

黄色ブドウ球菌がヒトに感染した場合「なぜ持続感染しやすいのか」、その理由は不明であることから、持続感染メカニズムの解明を進めています。その過程で、TSST-1がオートファジーを抑制することを見いだしました。オートファジーとは、本来飢餓細胞の延命策として細胞質にオートファゴソームと呼ばれる構造物を形成し、自らの成分を分解し栄養源とする現象として発見されましたが、外来性の微生物感染防御にも重要です。TSST-1はオートファゴソーム形成の中心分子であるLC3の発現を抑制すること、オートファジー抑制はスーパー抗原活性非依存性であること、また、他のSEsにオートファジー抑制活性が認められないことから、TSST-1に特異的な機能であることが示唆されました。現在さらに、黄色ブドウ球菌感染の持続感染とTSST-1のオートファジー抑制作用の関連性について研究を進めています。

(2) 黄色ブドウ球菌ワクチンの開発

SEsを標的としたMRSA感染症予防ワクチンを開発するため、まずMRSA臨床株のSEファミリー遺伝子の保有状況を解析したところ、TSST-1遺伝子保有率が高いことがわかりました。そこで、スーパー抗原活性を欠損させた無毒変異TSST-1 (mTSST-1) を作製し、マウスを用いてワクチン効果を検証したところ、菌体に対する抗体が誘導されないにもかかわらず致死性MRSA感染を予防できました。TSST-1に対する抗体は予防に有効であったものの不十分であったため、さらに解析を進めたところ、免疫マウスではインターロイキン-17 (IL-17) を産生するmTSST-1特異的ヘルパー T細胞 (TH17細胞) が誘導され、体内増殖時に黄色ブドウ球菌が分泌するTSST-1がTH17細胞を刺激しIL-17が産生され、さらにIL-17がケモカ

イン誘導を介して、食細胞の集積・活性化が起こり、菌が生体から排除されるメカニズムを明らかにしました。現在、より高いワクチン効果をめざし研究を進めています。

(3) SEAの嘔吐誘導活性メカニズムの解明

SEsの中でSEAは最も嘔吐誘導活性が強く、ブドウ球菌性食中毒の主因です。SEsの嘔吐誘導活性測定にはサルを用いますが、実験動物としてのサルの使用困難性から、そのメカニズムはほとんど解析されて来ませんでした。私たちは、スunksという小動物を用い嘔吐誘導活性定量法を確立しました。SEAをスunksに経口投与すると、腸管でSEAは腸クロム親和性細胞、神経細胞及び肥満細胞によるセロトニン (5-HT) 分泌を促進し、迷走神経を介して嘔吐中枢を刺激することが明らかとなりました。さらに、SEAは腸管粘膜に存在する5-HT保有肥満細胞の脱顆粒を誘導し5-HTが放出されることを見出し、SEAによる嘔吐誘導メカニズムの概要を解明しました。現在さらに、霊長類であるコモンマーモセットを用いた嘔吐誘導活性定量法を確立し、ヒトにおける嘔吐誘導メカニズムの全容解明の研究を進めています。



スunks (左) とコモンマーモセット (右)

4. おわりに

私たちは、宿主と病原微生物との攻防に関する研究を一貫して個体レベルで進めてきました。細胞レベルの研究に比べると、生体レベルの研究は明確な結果が出ないことが多く、動物実験を基盤とした感染症の研究者はマイナーです。しかし、個体レベルの研究でしか見えないことも多く、生体防御システムに対抗する病原体がとる戦略は実に巧妙であることがわかります。特に、本稿で紹介した黄色ブドウ球菌は、病原体として働く一方、皮膚、鼻腔、咽頭、腸管などで目立たぬように棲みついていることも多く、実に賢い細菌です。最近、腸内細菌をはじめとする常在微生物 (microbiota) と肥満や各種疾患との関係が注目され論文が急増しています。今後、私たちと微生物の攻防は新たな展開を迎えることは必至で、目が離せません。

最後に、今回の受賞はオール感染生体防御学講座で取り組んだ努力の結晶です。改めて、研究成果を挙げていただいた皆さまに深謝いたします。

平成27年度弘前大学学生表彰を実施



本学では、研究活動や社会活動、課外活動で活躍した学生及び学生団体を表彰する学生表彰授与式を、3月2日（水）大学会館3階大集会室で行いました。

今回の受賞者は、課外活動等で活躍した6団体、研究活動や課外活動で活躍した学生38名で、表彰式には各研究科長・学部長、指導教員及びサークル顧問の教員も出席し、佐藤学長から学生1人ひとりに表彰状と記念品が贈呈されました。

佐藤学長から、「本日こんなにも多くの学生が表彰され、喜ばしくそして誇らしく思う、皆さんには大いに誇らしく思っただき、一方で更に研鑽を積み、研究活動や課外活動に努力され、より多くの本学学生の模範となってほしい。」と学生の功績を讃える言葉が贈られました。

受賞者を代表して、理工学部物質創成化学科3年の及川龍二さんが「私たちの日頃の活動が認められ表彰されるということが非常に嬉しく誇りに思う。学内外での活動が、佐藤学長はじめ、多くの大学関係者の方々に支えられているということもあらためて強く感じた。今後も、自分たちが弘前大学の学生であるという誇りと自覚を持って、それぞれの活動に精進していきたい。」と謝辞を述べました。

平成27年度弘前大学学生表彰採択一覧

【団体】

課外活動で特に顕著な功績があった学生等

No.	団体名	受賞理由
1	医学部バドミントン部	第5回北日本保健学系学生バドミントン選手権大会 女子団体優勝
2	医学部競技スキー部	第57回東日本医科学生総合体育大会（スキー競技） 女子総合第2位
3	医学部卓球部	第11回全日本保健学生卓球大会 女子団体優勝 2014年度東日本医歯薬学生卓球大会 団体男子優勝／団体女子準優勝 第53回東北地区医科学生卓球大会 女子団体戦優勝
4	医学部ラグビー部	第58回東日本医科学生総合体育大会（ラグビー競技） 準優勝
5	医学部バレーボール部（女子）	第58回東日本医科学生総合体育大会（バレーボール競技） 女子団体準優勝
6	医学部ソフトテニス部（女子）	第58回東日本医科学生総合体育大会（ソフトテニス競技） 女子団体準優勝

【個人】

研究活動で特に顕著な成果を挙げた学生等

No.	氏名	推薦理由（概要）
1	齊藤 良明	本学で開発した人工筋肉を応用した補助人工の基礎的および同粒実験での応用研究を行い、その研究成果が「Journal of Artificial Organs」に掲載されたとともに、臨床の症例研究3編も国際的雑誌に採用されている。
2	福士 謙	平成27年4月18日～4月21日に開催された第103回日本泌尿器科学会総会において、「透析患者のN-結合型糖鎖の網羅的解析による新規バイオマーカーの検索」と題した研究発表を行い、日本泌尿器科学会総会賞を受賞した。

No.	氏名	推薦理由（概要）
3	小島 由太	平成27年3月20日～24日にマドリッドにおいて開催された欧州泌尿器科学会において、「Detection of core2 b-1,6-N-acetylglucosaminyltransferase in post-digital rectal examination urine is an independent predictor for extraprostatic extension of prostate cancer」に関する研究発表を行い、ベストポスター賞を受賞した。
4	藤田 尚紀	平成27年4月18日～21日に開催された第103回日本泌尿器科学会総会において、「前立腺癌神経周囲浸潤におけるラミニンレセプターの発現調節とEMTとの関連性」に関する発表を行い、日本泌尿器科学会総会賞を受賞した。
5	山上 廣城	平成27年9月14日～18日に同志社大学（京都）で開催されたThe Joint Conference of 6th International Symposium on Physical Sciences in Space (ISPS-6) and 10th International Conference on Two-Phase System for Space and Ground Applications (ITTW2015) において「Heat Transfer Enhancement Mechanism of Open-Loop Pulsating Heat Pipe Using Self-Rewetting Fluids」に関するポスター研究発表を行い「Notable Poster Awards」を受賞した。
6	及川 祐梨	平成27年10月20、21日に全国規模レベルで開催された2015年度色材研究発表会において、「種々の低分子有機化合物がカプセル化されたフルオロアルキル基含有ビニルトリメトキシシランオリゴマー/タルクコンポジット類の水・油分離への応用」に関する口頭発表を行い、最も優れた発表者に贈られる最優秀講演賞を受賞した。
7	関口 龍太	「有機合成化学的アプローチによる湾曲した炭素クラスター構築」を研究課題として、「巨大環状のポリフェニレン化合物の高効率な合成法の確立」と「高効率な環状脱水素反応に基づく湾曲した炭素クラスター構築」に関して大きな成果を挙げてきた。その成果は、本年本学生が第一著者として、有機合成化学の専門誌では、最高峰のアメリカ化学会の学会誌、The Journal of Organic Chemistry (2014年のインパクトファクター4.721) に刷り上がりで19ページに及ぶ論文として発表に至った。 [Preparation of a Cyclic Polyphenylene Array for a Zigzag-Type Carbon Nanotube Segment, R. Sekiguchi, K. Takahashi, J. Kawakami, A. Sakai, H. Ikeda, A. Ishikawa, K. Ohta, and S. Ito, J. Org. Chem., 80, 5092-5110 (2015). (DOI:10.1021/acs.joc.5b00485)]
8	谷脇 旦	日本化学会の論文誌「Bulletin of the Chemical Society of Japan (BCSJ)」(インパクトファクター：2.210)にて、「四鉄上におけるルイス酸反応場の開発」に関する研究を第一著者として公表し、その論文がBCSJ賞論文として選定された。
9	JENNY RIZKIANA	査読を経た高インパクトファクターの国際学術誌に5編の論文と国内外学会において15回研究発表し、世界に通用する大きな研究成果を挙げた。
10	DENI SHIDQI KHAERUDINI	査読を経た高インパクトファクターの国際的な学術誌に10編の論文と国内外学会において18回口頭発表し、世界に通用する大きな研究成果を挙げた。
11	Wahyu Bambang Widayatno	査読を経た高インパクトファクターの国際学術誌に5編の論文と国内外学会において12回の発表をし、世界に通用する大きな研究成果を挙げた。
12	荒山 美紀	「新規二次代謝物探索研究」に取り組み、多くの新規物質を発見した。その成果を国際誌Tetrahedron誌 (IF.2.68) に筆頭著者として1年間に二報の論文として公表した。

課外活動で特に顕著な功績があった学生等

No.	氏名(団体名)	推薦理由（概要）
1	亀田明香里	第88回全日本学生スキー選手権大会（平成27年2月25日～3月2日） 女子2部クロスカントリースプリント（クラシカル） 第1位 同 クロスカントリー10km（フリー） 第3位
2	泉 高祥	ロシア学生スポーツフェスティバル柔道大会 男子団体 優勝
3	村上瑠希也	第47回全日本ジュニア柔道体重別選手権大会東北予選会 81kg級 優勝
4	舘坂 将矢	平成27年東北学生柔道体重別選手権大会 60kg級 優勝 第47回全日本ジュニア柔道体重別選手権大会東北予選会 60kg級 優勝 平成27年度講道館杯全日本体重別選手権（リオオリンピック1次予選） 出場
5	及川 龍二	第65回東北地区大学体育大会（平成26年6月14・15日） 男子100m背泳ぎ 第1位 第29回北部地区国公立水泳競技大会（平成26年6月28・29日） 男子100m背泳ぎ 第1位 男子200m背泳ぎ 第1位
6	奥村 優人	第39回日本リバーベンチャー選手権大会（平成27年5月30～31日） 二人乗り部門 第1位
7	入野谷千代子	第39回日本リバーベンチャー選手権大会（平成27年5月30～31日） 二人乗り部門 第1位
8	高橋麻里奈	第44回東北学生陸上競技選手権大会（平成27年10月2～4日） 女子円盤投げ 第1位
9	秋元 文子	第44回東北学生陸上競技選手権大会（平成27年10月2～4日） 女子400m 第1位 女子200m 第3位 第37回北日本学生陸上競技選手権大会（平成27年8月8・9日） 女子800m 第1位 女子400m 第2位 第66回東北地区大学体育大会陸上競技（平成27年7月18日） 女子400m 第1位
10	山形真由佳	第44回東北学生陸上競技選手権大会（平成27年10月3日） 女子ハンマー投げ 第1位 第68回東北学生陸上競技選手権大会兼第28回ユニバーシアード競技大会日本代表選手選考競技会（平成27年5月15～17日） 女子ハンマー投げ 第1位
11	大久保玲美	第68回東北学生陸上競技選手権大会兼第28回ユニバーシアード競技大会日本代表選手選考競技会（平成27年5月15～17日） 女子10000m 第1位 第37回北日本学生陸上競技選手権大会（平成27年8月8・9日） 女子10000m 第1位
12	浦田 風	第58回東日本医科学生総合体育大会（陸上競技） 女子円盤投 第1位 第27回北日本医科学生陸上競技大会 女子円盤投 第1位
13	横山 和樹	第27回北日本医科学生陸上競技大会 男子110mH 第1位 第26回北日本医科学生陸上競技大会 男子110mH 第1位 ※平成26年度

No.	氏名(団体名)	推 薦 理 由 (概 要)
14	賀佐 一大	第58回東日本医科学生総合体育大会 (陸上競技) 男子200m 第2位 第26回北日本医科学生陸上競技大会 男子100m 第1位 ※平成26年度 男子200m 第1位 ※平成26年度
15	佐々木 彩	第27回北日本医科学生陸上競技大会 女子3000m 第1位 第13回弘前・白神アップルマラソン (フル女子39歳以下) 第1位/238人中 第71回全日本医歯薬獣医学大学対抗陸上競技選手権大会 女子3000m 第2位 ※平成26年度
16	小田桐直生	第58回東日本医科学生体育大会 卓球競技男子ダブルス 優勝
17	桑田 大輔	第58回東日本医科学生体育大会 卓球競技男子ダブルス 優勝 卓球競技男子シングルス 準優勝
18	佐々木裕香	第11回全日本保健学生卓球大会 個人戦ダブルス 優勝
19	木村 友香	第11回全日本保健学生卓球大会 個人戦ダブルス 優勝
20	宮崎 真実	第53回東北地区医科学生卓球大会 女子シングルス 優勝
21	板矢 一希	第5回北日本保健学系学生バドミントン選手権大会 (平成27年9月) 男子シングルス 優勝 男子ダブルス 優勝
22	宮川 京大	第5回北日本保健学系学生バドミントン選手権大会 (平成27年9月) 男子ダブルス 優勝
23	川崎 圭恵	第5回北日本保健学系学生バドミントン選手権大会 (平成27年9月) 女子シングルス 優勝 女子ダブルス 優勝
24	山口 愛	第5回北日本保健学系学生バドミントン選手権大会 (平成27年9月) 女子ダブルス 優勝
25	高橋 茜	第57回東日本医科学生総合体育大会 スキー競技女子回転 第1位 スキー競技女子大回転 第1位 スキー競技女子スーパー大回転 第2位 女子複合最優秀選手賞
26	宇佐美真太郎	第57回東日本医科学生総合体育大会 スキー競技男子回転 第1位 スキー競技男子大回転 第1位 スキー競技男子スーパー大回転 第1位

弘前大学「第11回学生相談を考える会」を開催



平成28年2月22日(月)、学生相談に携わる学内外の教職員を対象にした「第11回学生相談を考える会」を開催しました。同会は多様化・複雑化する学生相談に適切に対応し、学生への支援体制を充実させようと平成20年度から開催しており、今回で11回目の開催となります。県内外からの大学関係者を含め約50人が参加しました。

今回は、筑波技術大学障害者高等教育研究支援センター准教授の白澤麻弓先生をお招きし、『障害者への不当な差別的取扱いの禁止』と「合理的配慮の提供」について－国大協作成ガイドラインをめぐって－』と題した講演をしていただきました。

その後、参加者と行われたディスカッションでは、白澤先生、保健学研究科石川教授、教育学部松本教授、土岐コーディネーターを交え、聴覚障害者のためのノートテイク等、支援する側の技量について米国の事例も交え、意見交換が行われました。

最後に白澤先生から、障害者への支援を通じて、多様な視点が持てることを喜んで、どんな支援が可能かを検討していくことも必要ではないか、という印象的なお話もあり、非常に貴重な機会となりました。

異常な暖冬のせいもあってか、キャンパスのあちこちに早春の気配がただよっております。大学人にとってこの時節は、ご無事に退職なさる諸先生への感謝の念と、社会に漕ぎ出してゆく学生諸君の前途を祝する気持ちとが、こもこも湧いてきて、得も言われぬ想いに胸が切なく

編集 後記

なります。ここに第186号をお届けいたします。今号の特集は恒例の「卒業・修了・退職にあたって」です。けふわかれあすはあふみとおもへども夜やふけぬらん袖の露けき

紀利 貞 (F)

●知ってる？

弘大生協の環境活動

弘前大学生協では事業活動や組合員活動における環境負荷軽減を推進しています。販売している内製弁当の容器リサイクルを初め、レジ袋使用枚数の削減、割りばしやペットボトルのふたの回収を行っています。また生協学生委員会が中心となり、身近な環境活動にも関わっています。



使用済み割りばし
→北海道の王子製紙へ送り、リサイクルされています。

デポジット容器
→山形県のヨコタ東北で回収をして、リサイクルされています。(※注1)

ペットボトルキャップ
→青森県内の青南商事へ持ち込み、リサイクルされています。(※注2)

レジ袋削減
→レジ袋代としてお預かりした5円をもとに、学内の花壇整備活動をしています。

植樹活動
→青森県生協連の“ふれあいの森”の植樹祭に参加をし、実際に植樹を行っています。

自転車回収
→学内の放置自転車を整理、回収し、リサイクルをしています。(※注3)

※注1 回収率は、H25年度50.0%、H26年度59.8%、H27年度59.9%となっています。

※注2 再商品処理後に換金されて、白神山地の保全活動、環境活動に寄付されています。

※注3 市内の自転車店に協力を依頼し、使用できるパーツを使い、リサイクル自転車として販売しています。

☆☆研究室などで集めている容器があれば、こまめに**生協店舗**へお持ちください☆☆

弘前大学ご卒業をお慶び申し上げます

平成27年度の金木農場産米を使用し醸造された日本酒「弘前大学」が、2月6日に発売されました。口に含むとふくよかな香りがし、飲み口はすっきりと柔らかく、日本酒を初めて飲む方でも飲みやすいお酒です。

今後のご活躍が期待される卒業生の皆様にも、様々な場面でご愛飲いただければ幸いです。



■グラス(2個)セット
2,966円

弘前大学オリジナル 日本酒「弘前大学」
1本 2,143円(720ml)

●日本酒「弘前大学」は下記店舗でお求めいただけます。

弘大生協サリジェ tel 0172-34-4622

※弘大生協ホームページからもご注文いただけます。

■新入生サポートセンターの営業について

弘前大学生協では、新入生みなさんがスムーズに新生活や勉強準備が出来るよう、食堂ホール内に新入生サポートセンターを開設しています。新入生サポートセンターでは、弘前大学の学生たちがアドバイザーとなり、新入生、保護者様のサポートに努めています。

サポートセンターの営業期間中、食堂をご利用される方々には、席の減少などご不便をおかけいたしますが、何卒ご了承ください。

◆ 新入生サポートセンター営業期間 ◆

2月12日(金)～17日(水)

3月6日(日)～4月6日(水)

<サポートセンターへのお問い合わせ>

フリーダイヤル 0120-154-163

= 4月から、学部生→大学院生・研修医、または学生→大学職員になる方は組合員の身分変更をお忘れなく! =

弘前大学生協生活協同組合 (0172-34-4806)



弘前大学 学園だより
Vol.186



HIROSAKI
UNIVERSITY

国立大学法人 弘前大学「学園だより」編集委員会

委員長 荷見 守義 (教育委員会)

委員 細矢 浩志 (人文学部)

山田 史生 (教育学部)

松谷 秀哉 (医学研究科)

工藤 幸清 (保健学研究科)

小菅 正裕 (理工学研究科)

坂元 君年 (農学生命科学部)

澤田 祐子 (学生課)

粕谷 常好 (学生課)

印刷：コロニー印刷